

下里に生きる

戦争を経験した教師

話し手 島田六平

聞き手 野原啓吾 畠田虎太郎

(埼玉県立松山高等学校2年、1年)

みんな苦しい時だったね

空襲で昭和20年5月25日夜から26日未明にかけて今の新宿で家が焼けたわけ。それで家族そろって疎開してここへ来たわけ。疎開と言うのは、縁故疎開と集団疎開とに二つに分かれるん。学校ごとに集団疎開で、僕らの学校の子は群馬の方行ったらしいけど、僕は母方の実家がこの小川町の八和田ってとこにあったから、そこに一人で疎開してきたん。東上線乗ってきたわけよ。当時はね、電車が混んでてね、「買い出し電車」つったんだ。食料がないから田舎へみんな東京の人が食料を買いに来るんだ。そういう人たちが乗ってたから「買い出し電車」つった。

その後、みんな家族が焼け出されて、向こうに住むところがなくなったから、こっちに引っ越してきてね。んで、こっち来たってね、家があるわけじゃないからよ。そのうち、ちょうど一部屋あいている家があったんで、そこを借りてひとまず家族がみな入った。ところがそこへ住んでた人が兵隊から帰ってきたんで、また違うところに引っ越してっていろいろなとこでね。みんな苦しい時だったね。

ここに来た時はね、僕は小さいころの遊びなんて知らないん。こっちの遊びはね、だから魚釣りだけは好きでよくやった。川が流れてるから。たくさん釣れたからね。それは遊びじゃないんだよ、みんなね。それはもう、食料だよ。食べるために魚を釣ってきた。みんなこの辺の子供はきつとそうじゃないの。僕の家だってお米はみんな配給だから食べるものがないんだ。焼け出されてきたってことは何も道具がないんだよ。何にもないとこで、あるのはもってきた蓋のなくなったやかんだけなんだ。だからここへ引っ越してきておふくろの兄弟なんかがかまどをもってきてくれたり、釜をもってきてくれたり、米を少し持ってきてくれたり、そんなようなもんだったよ。けど、ほんとにご飯炊くんじゃないん。大きな釜にね、水がいっぱいあって、そん中に少し米があって。そのおかげの中ね、なにもないときは野草を摘んでくるんだ。食べられるやつを摘んできてその中に入れたりした。大根の葉っぱを干したのを馬にくれるのがあるんだけど、その葉っぱをもらって食べたり。本当に戦争の被害を受けた人ってのはね、苦しい生活をしてきたよ。農村にいたから食べるものがあるだろうって思ったって無いんだよ、まったくないん。その頃、短麺という3cmくらいのうどんの配給があったり、燃料だって配

給だった。

たまたま僕が生まれたころ、昭和9年ごろ。この、今住んでるところ畑と田んぼを少し買っといたんだな。それで畑を返してもらってここへ掘立小屋を造ったんだな。そんなときは嬉しかったねえ。どんな小さな家でも、六畳一間の小さな家だったけど、自分の家がようやくできた。

この地域の人たちは素晴らしい

ここではね、分校のすぐそばに有機農業やってる金子さんって人がいるの。もう40年もやっているのかな。で、15、6年前からその有機農業に倣って勉強してこうって空気がこの集落に出てきてね。有機農業っていうのは要するに化学農薬を使わない。無農薬なんだ。化学肥料も非常に少なく作ってるわけね。普通田んぼには除草剤撒くのよ。稲は枯れないけどね、草は枯れるように。そういう除草剤も撒かないから、みんな草退治の為に苦労してるけどね。でもおかげで田んぼに住む水中動物なんかもだんだん増えてきた。自分達の水田をよくするためにその水田で無農薬で作ろうって。ある時はひえがいっぱい生えちゃったりして大変だった時もある。ひえを生やさないためにはどうすればいいかって勉強会を開いたりしてみんな努力してるね。この地域の集落はとても小さな集落だけど、僕は傍から見ていて本当に素晴らしい人たちだなんて思ってる。

僕は野菜を作ってるだけでね。ちょうど敷地の半分が屋敷で半分向こうは畑だから自分ちで食べるだけの野菜を作ってるの。売ったりは僕の所はしてない。んでこの地域ね、みんなが努力して有機農業にしたり、その努力が環境を良くしたりして、それで3年前か4年前になるかな、天皇杯ってのをもらったんだ。全国で「豊かなむらづくり部門」ってのですね。それで草刈りの応援ってのでも刈援隊って組織を作ってくれて、それで地域をきれいにしようとしてくれてます。

今若い人がどれくらいいるってのは分からないけども、農業を継いでくって人がどれくらいいるかが心配だね。よそからきて有機農業をやりたいっていうんでね、田んぼを借りてやっている人もいます。



有機農業を最初に始め霜里農園を営んでいる金子美登さん

教師時代

小学校の先生になったのは昭和33年頃だね。なりたいと思ったからなったんだ。

一番最初ね、秩父郡の大滝村ってのがあつた。大滝村にはね、5つの分校があつた。中津川分校ってとこに最初へ行つた。そこに3年間いたね。本校から中津川分校までは16キロもある。分校ってのはその地域に住んでる人の学校だね。で、その後は大川小学校ってのがあつたんだけど、そこへ10年ぶりってそれから金勝山に少年自然の家ってのがあつたんだけど、今は元気プラザってなってる。あれを作るときに出た4年間いたかな。プラネタリウムを大体やった。そこから都幾川の奥の方の小学校へ行つてそこに3、4年いた後、文部省の国立女性婦人会館に出た。そこが終わってから今度坂戸の中学へ行つて、また比企の方へ帰ってから3年間ブラジルへ、今度は3年間、マラウスってところに行つた。マラウスに日本人学校があるから行つたんだ。

ブラジルでの暮らしはそりゃ日本とはいろいろ違うからな。でも文化ってのは異なっているけど、それぞれを尊重すればいい。言葉の不自由はあるけども、大体アパートから学校行けば日本語だし、大体買い物ってのはスーパー行けば話なくても買い物できるからそう困つたことはなかったね。

最後はまた小川へきて終つたけど。勤めは、中学の校長したり、小学校の校長したり色々だったけど。

退職後小川町の教育相談室ってのがあつて、色々不登校の子供やそれからさまざまな問題を抱えた子供たちの相談相手として、親や子供の相談室で4年間くらいした。

やっぱり寂しいねえ

この地域にも分校があつたんだよ。下里分校ってのがあつた。ちょうど僕が区長をしているときに廃校という問題が起つた。分校へ行く子供が7人くらいい

たんだよ。だけでも7人やそこの何人かで学校生活を送ることにね、親が不安を感じた訳だね。ここに住んでればね、この分校へ行かなくてはならないっていう規則があるんだよ。だから親が子どもを別な家へ移住させちゃうわけ。実際はここへ住んでいる訳だけど、住民票だけ移しちゃうわけ。子供をみんな本校へやっちゃうと、上がる子供誰もいなかった。それでそんな時ちょうど僕がこの地区の区長やって、区長さんの集まりのときに、それじゃどうしようかってことで全部アンケートを取つた。そしたら8割5分が、誰も行き手かまらんじゃ、もう分校をなくしてもいいという回答があつた。で「分校をなくしてもいいと、本校へ行きたがっている」という署名運動をして、教育委員会にそれを届けた。だけどやっぱり寂しいねえ。分校がなくなるってことは要するに地域から学校が一つ消えるわけじゃない。学校がなくなるとだんだん戸数が減ってくる感じがする訳だね。で、分校は最初林校として、3年か4年後には廃校になって、今は建物だけ残ってる。この地域どつて小学生が一人か二人かな。本当になくなっちゃつて。みんなでどうにか限界集落にならないように努力している。そんな感じですね。

(取材日 平成26年7月30日)

プロフィール

島田六平 (しまだろっぺい)

昭和9年1月16日生まれ 80歳

東京都中野区向台町で生まれる。小学校5年生の時第二次世界大戦の空襲を受け、家が焼け、昭和20年5月25日夜から26日未明にかけて小川町八和田に疎開をする。その後昭和33年頃に小学校教諭になる。退職後は小川町教育相談室で働く。現在は家庭菜園を行っている。

取材を終えての感想

下里地区の人が地域の為に皆一生懸命頑張っていることを知り、自分も少くくは地域に貢献できるよう努力しなくてはならないと思いました。自分達から無農薬で農業をしようという姿勢に尊敬しました。戦争時代の事は歴史で知っていたと思つていましたが、想像と全然違つた現実に驚きました。自分たちはとても恵まれた生活をしていると思つました。

外国での生活はそこまで不自由しない事は意外でした。

下里地区も若者が少なくなつて過疎化も危ぶまれているのでこれから自分たちのような若者がどうにかしていかなければいけないと思つました。初めてのインタビューで緊張しましたがとても良い経験になりました。この経験をこれからも活かしたいと思つました。